

研究テーマ

ソーシャルスキルトレーニングを取り入れ、気持ち伝えることができるようにする。

本実践に関連する児童の実態

対象児童 小学校第5学年

○課題

- ・会話が一方的になりがちで、相手の話を聞こうとしない時がある。
- ・言葉からイメージすることが苦手で、自分の思い込みによる発言が多い。

○強み

- ・交流学級の児童に積極的に関わることができる。
- ・視覚的掲示物があると、落ち着いて考えることができる。

指導目標・指導仮説

自立活動「すっきりトークでお互いすっきり」

目標

相手に伝える言い方を知り、友達との会話の中で伝わり方を意識して話することができる。

指導仮説

提示された実際に起こりそうな場面について、ワークシートでアサーティブな言い方を考え、ロールプレイングで練習すれば、実際の場面でも使えるようになるだろう。

指導・評価の計画

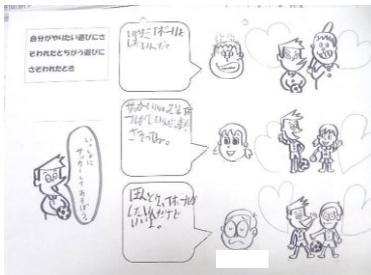
◆表1 指導・評価の計画

	主な学習活動	目標	評価方法
1次	アサーティブな言い方について知る。	いろいろな場面でのアサーティブな表現を知ることができる。	ワークシート 発言
2次	アサーティブな言い方を練習する。	ロールプレイングをして言い方の練習する。	ワークシート ビデオ
3次	意識してアサーティブな表現を実践し振り返る。	授業で身につけたスキルを友達との会話で使うことができる。	行動観察 振り返りチェックシート

◆表2 実践前後の変容の評価

評価内容	評価方法
実践前後での、友達との会話の様子	①行動観察 ②振り返りチェックシート

指導の実際①



アグレッシブな表現
(自分の主張のみを伝える)

アサーティブな表現
(相手のことを思いやりながら自分の主張を伝える)

ノンアサーティブな表現
(自分の主張ができない)

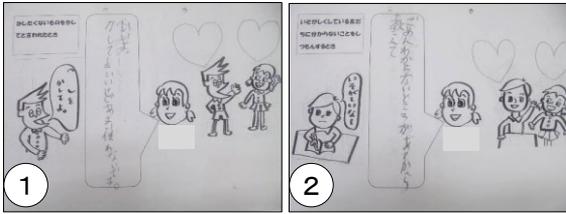
ワークシートを使い、3つの表現の違いがあることに気づく。

指導の実際②



ロールプレイングをすることで、言い方の違いに気づき、言い方を練習する。

指導の実際③



1

①相手の気持ちによりそって「いいよ。」と言った後、貸したくない自分の気持ちを「貸してもいいけどあまり使わないでね。」と表現し、相手を思った表現をしようとしている。

2

②「ごめん。」に忙している友達に対する思いが込められている。

指導の実際④



実際の場面を取り上げ、アサーティブな言い方を考える。

学習過程の評価

	学習活動	児童の状況	達成状況
1次	アサーティブな言い方について知る。	いろいろな場面でのアサーティブな表現を知ることができた。	○
2次	アサーティブな言い方の練習をする。	ロールプレイングをしながら、アサーティブな言い方をされるといい気持ちになると発言するなど、良さに気づくことができた。	◎
3次	意識してアサーティブな表現を実践し振り返る。	「自分の言い方がアグレッシブな言い方だったので気をつけたい。」と振り返る発言が見られた。身につけたスキルを実際に使うことは、まだできていない。	○

実践前後での児童の変容

実践前	実践後
<ul style="list-style-type: none"> ・友達とけんかになった時、一方的な自分の言い方について振り返ることができなかった。 ・相手の言い方について腹を立てることが多かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手のことを思った言い方ができなかったときに、アグレッシブな言い方になったと自分の言い方を振り返ることができた場面が2回あった。 ・苦手な相手に肯定的な言い方で話すことができた。 ・振り返りチェックシートの自己評価では、自分はアサーティブな言い方ができたと答えていた。

指導仮説の検証

●児童生徒は目標を達成したか。
 ・十分達成したとは言えない。
 ●判断の理由・根拠
 ・アサーティブな言い方について知り、ロールプレイングでアサーティブな言い方の良さに気づくことができたが、友達との会話で実際に使うことはできなかった。

●指導の工夫は有効であったか。
 ・アサーティブな言い方を知ることは、有効であった。
 ●判断の理由・根拠
 ・児童の好きなキャラクターを使うことで3つの言い方の違いに気づき、さらにアサーティブな言い方の良さに気づく発言もあり、自分の言い方を振り返ることにつながった。

指導の改善案

成果(よかった点)	課題(改善が必要)
<ul style="list-style-type: none"> ・ロールプレイングで両方の立場の気持ちを感じることができた。 ・児童の知っているキャラクターを使うことで、よい言い方について理解しやすかった。 ・友達とけんかになったとき自分の言い方を振り返ることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実際にありそうな場面を想定し提示したが、想定した場面になることがなく、評価しにくかった。 ・アサーティブな言い方とつきの会話の中で考えるのは児童実態として難しくかった。 ・実態把握をするために、より客観的なデータを取っておく必要があった。

成果と課題を踏まえた改善案

・アサーティブな言い方は、相手のことを思いやりながら、自分の主張を言うことだったが、児童実態として、つきの会話では難しいため、まずは、自分の意見をできるだけ優しい口調で言うことを目標にスモールステップで指導する。
 ・交流学級担任と協力して、アサーティブな言い方を使える場面を意図的に仕組み言えた実態を感じさせる場を作る。
 ・児童実態により合わせるため、客観的なデータをもとに実態把握を丁寧に行い実践に生かす。